

■矢立のスギ

江戸時代から様々な書物で紹介され、浮世絵にも描かれてきました。その名の由来については、出陣する兵士がこの杉に矢を射立て、武運を祈ったことから「矢立ての杉」と呼ばれることになったとするのが一般的ですが、源 頼朝^{よりとも}の巻狩説、源 為朝^{ためとも}の強弓説など、諸説あります。

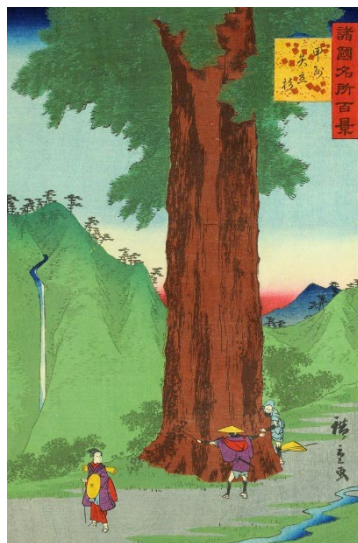
根廻^{ねまわ}りは14.8m、目通^{めとお}りは9.07mで、幹は地上約21.5mで折れ、その周囲から出た枝が幹のように伸び、樹高は約26.5mあります。太さの割に高さがないのは幹の途中で折れているからで、落雷によって折れたと言われています。

根本には、うろ（空洞）があり、幹の中は上まで空洞となっていて青空が見られます。これは、1937（昭和12）年に、うろで野宿した浮浪者の焚火による火災のためで、今でも内側は炭化して真っ黒になっています。

また、根本の樹皮が剥^はがれているのは、「明治40年の大水害」（1907年）で傍^{かたわ}らの沢が崩壊して土石流が押し寄せたためと伝えられています。

樹齢は、はっきりとはわかりませんが、中世の兵士たちが矢を射立てたという伝承が事実だとすると、すでにその頃、目標として目立った存在であった、つまり巨木であったはずであり、相当に古いものと考えられます。

歌川 広重^{うたがわひろしげ}の「諸国名所百景・甲州矢立の杉」は、スギの全景を画面に納めない構図と、大の男2人が腕を広げて幹回りを測ろうとするものの半分にも届かない様子や、女性の旅人が振り返って見上げる様子などを描くことで、その巨大さを表現しています。



博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト

大月の名所をめぐる小さな旅

笹子峠自然遊歩道を歩いてみよう

大月市郷土資料館



江戸時代、笹子峠（標高1,096m）は甲州道中（日本橋～下諏訪44宿53里）の中で、一番の難所と言われました。黒野田宿^{くろのた}（大月市笹子町）から駒飼宿^{こまかい}（甲州市大和村）まで往来するのに、険しい峠道を約500m登り降りしなければならなかったからです。

明治時代に入ってから、明治天皇の巡幸^{じゅんこう}や国道としての指定、県道への格下げをきっかけにして、道幅を広げたり、勾配^{こうばい}を緩やかにするために蛇行^{だこう}させたりしたため、江戸時代の道筋や景観とはだいぶ異なりましたが、蛇行させたことがかえっていくつかの箇所では部分的に旧道の面影^{おもかげ}を残すこととなりました。

大月市では、中腹に位置する県道212号日影笹子線 美久保橋から矢立のスギに至るまでの部分を整備して「笹子峠自然遊歩道」を造りました。県道沿いに立つ看板をたよりに「遊歩道」に入ると、わずか800mほどの短い距離ですが、沿道にはかつての街道の賑いや変遷を知ることのできる遺物をいくつも見る事が出来ます。

2019（令和元）年には、「遊歩道」を含めた笹子峠越の道が文化庁により「歴史の道百選」に追加選定されました。

夏休みを使って、このミニブックを片手に「歴史の道」を歩き、いろいろな気づきや

発見を通して郷土への学びを深めてみましょう。

■茶屋跡

沢沿いにしばらく遊歩道を進むと視界が急に開け、右側に石積みが見えます。

ここには、「中の茶屋」、「笹子茶屋」、あるいは「三軒茶屋」ともよばれた茶屋があり、明治のころまで旅人に、そば・麦めし・餅・酒などの飲食物を提供していました。

地元の名物とされている「笹子餅」（(株) みどりや製造）は、この茶屋で売られていた「峠の力餅」に由来するといえます。

鉄道開通後は、笹子峠を人馬で越える人は少なくなり、茶屋は廃れてしまいました。

■明治天皇御野立所跡 碑

1880（明治13）年の天皇^{じゆんこう}巡幸の際には、一行の休憩地としても利用され、跡地の奥には「明治天皇 御野立所跡」の石碑が建っています。（1937（昭和12）年建立）

天皇の権威を利用して江戸幕府を倒した明治新政府は、諸改革を進めるにあたって、民衆に権力者の交代と支配の正当性を認めさせる必要がありました。そのための広報活動として全国各地を天皇が訪問する「天皇巡幸」が97回も行われました。

天皇は数百人の供奉^{ぐふ}者を引き連れて巡幸し、行く先々では孝子・節婦・高齢者・地域功労者などに褒賞^{ほうしょう}（金品）を与えたりして、絶大な権力と仁心^{じんしん}を備えた支配者としての姿を示しました。

山梨・大月への巡幸は、三重・京都への途上で行われ、6月16日早朝に皇居を出立した一行は、18日の昼前に犬目峠を越えて鳥沢に入り、黒野田^{くろのた}で宿泊後、翌朝には笹子峠を越えて駒飼^{こまかい}へと抜けていきました。

『明治天皇御巡幸紀』には、天皇は峠越えを前に、矢立のスギの手前にあった中茶屋で休憩し、銀盆に盛った富士氷を食べたと記されています。

■一等水準点標石

石積み^{ふもと}の麓側の角には、一等水準点の標石があります。



水準点とは、土地の高さを測るための基準となる座標点で、一等水準点は、主に主要国道沿いに約2kmごとに設置されています。地形図では口の中に・がついた記号で表わされます。1932（昭和7）年に発行された地形図までさかのぼって確認することができました。

国土地理院の「点の記」という記録には、99という番号が振られ、1925（大正14）年に選定、標石と4つの防衛^{ぼうえい}石を埋設、標高899.8363mと記されています。

一等水準点がここにあること、また昔の地形図の道路を表わす記号からも、この道がかつては国道だったことがわかります。

■庚申塔

石積みの峠側の角には青面金剛^{しょうめんこんどう}と三猿^{さんえん}が刻まれた庚申塔があります。

中国の道教の教えによると、人間の体内には三尸^{さんし}という虫がいて、旧暦で60日に一回巡ってくる庚申（かのえさる）の日に眠りについた宿主の体内から抜け出して天に昇り、天帝^{てんてい}に宿主の日頃の行いを報告し、その報告の内容によっては寿命を短くされてしまうといわれていました。

そこで、人々は庚申の夜は一ヶ所に集まり、長生きするためには三尸の虫が天に昇るのを防がなければと夜を徹して念仏を唱えて夜明けを待ちました。このグループを庚申講^{こう}、この行事を庚申待^{まち}といいます。

庚申待は平安時代からありましたが、民間信仰として庶民の間に広まったのは江戸時代に入ってからで、庚申塔は、庚申待を3年18回続けた記念として日本各地で盛んに建てられました。

その形は、文字だけを刻んだシンプルなものから、仏教の本尊である青面金剛や、庚申の「申」つながり「見ざる、聞かざる、言わざる」に通じて三猿像を庚申塔に刻んだものまで、様々です。

風化により傷みが激しく、残念ながら、いつ、誰が建てたのかはわかりません。

